

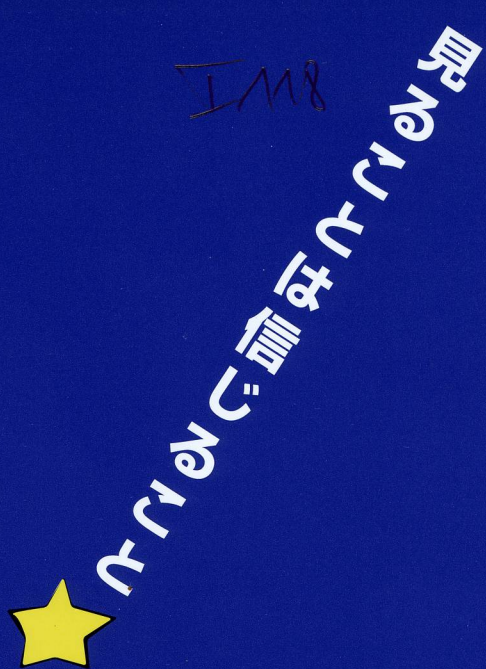
広島市現代美術館では、ミュージアム・スタジオにおいて国内外で活躍する若手作家の展覧会を開催してきました。同シリーズの第6回目の展覧会として八谷和彦の個展を開催します。

八谷和彦(1966年生まれ)は、『視聴覚交換マシン』(1993年)で知られるように、コンピュータ等のニューメディアを取り入れた装置のような(多くの場合、参加・体験型の)作品を発表してきました。そのひとつに、コンピュータ通信を使った不特定多数の人々による交換日記である「メガ日記」プロジェクトがあります。参加者は、そこに書き込まれた日記から、他の人の日々の生活や思考を知ることになります。それは、実際に会って言葉を交わすよりも、あるいは純粹で濃密な関係を育む可能性を持つものです。

この度、広島で発表される新作は、いわば「メガ日記」のインスタレーション版です。会場には電光掲示板が設置され、プロジェクトに寄せられたさまざまな人々の日記が流れています。展覧会はプロジェクトとリンクしており、みなさん自身が「メガ日記」プロジェクトに書き込んだ文章を、会場で見ることもしこり得ます。ただし、それを肉眼で見ることにはできません。この作品は、見ようとする積極的な意志を持ち、装置を使って、はじめて目に見えるようになっています。

この作品を八谷和彦は、『星の王子さま』になぞらえました(住倉良樹氏によるテキストを参照)。孤独な王子さまが、多くの個性に出会い、相手を理解しようとするを通して自分自身に気づいていく旅の物語が、この作品を見る人々にも起こることを期待しながら。「見ることは信じること」八谷和彦展をどうぞ見にいらして下さい。「メガ日記」プロジェクトへの参加もお待ちしています。

多数ご来場の際はしばらくお待ちいただく場合もあります。あらかじめ時間の余裕を持ってご来館下さい。



八谷和彦展 HACHIYA Kazuhiko Exhibition 「見ることは信じること」 Seeing is believing

1996年6月15日(土)～7月14日(日)

開館時間・10:00～17:00 (入館は16:30まで) 会期中無休

会場・広島市現代美術館ミュージアムスタジオ (入場無料)

主催・広島市現代美術館

協力・NTTインターコミュニケーション・センター(ICC)推進室

技術協力・森脇裕之 幸喜俊

★6月15日(土)14:00～ アーティストトーク(ミュージアムスタジオ)



広島市現代美術館
Hiroshima City Museum of Contemporary Art

〒732 広島市南区比治山公園1番1号 電話082-264-1121

たいせつなものは、目ではみえない

「見ることは信じること」鑑賞の手引き

住倉良樹

text by Yoshiki Sumikura featuring Saint-Exupéry

○やあ。1年ぶりだね。

●……どうしたの。突然。

○夢を見たんだ。それも、きみにぜひ聞いてほしい夢なんだ。

●わたし、あなたの夢の中で何か悪さでもしたかしら……。

○いや、きみは結局、出てこなかった。誰もいない、とても大きな図書館にいる夢なんだ。図書館といってもただの図書館じゃない。日記の図書館なんだよ。果てしなく続く本棚という本棚に、床から天井までびっしりと、古今東西、膨大な数の日記が並んで。日本語以外にも、英語、フランス語、ロシア語、中国語、ハングル語……もう、ありとあらゆる国の言葉で書かれた日記、見覚えもない名前が背表紙に刻まれた日記帳でいっぱいなんだ。すごいだろう？

●そうね、ただの図書館じゃないことは確かだわでも、それ以上に驚きなのはあなたのほうよ。1年間まるっきり連絡もなしで、いきなり昨日の夢の話……。わたし、あなたのことを、もういなくなってしまう人なんだと思うようにしていたのに。それでも、何かを見つけたり、感じたりするたびに、これをあなたに伝えられたらと、一日に何度も何度も思ってたわ。

○知ってるさ！ きみは毎日そう書いていた

●……どういこと？

○だからね、ぼくはこの図書館で、きみの日記を読み夢を見たんだよ。子どものころからきみがつけてきた日記を、全部、読ませてもらったのさ

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは1900年6月29日、フランスのリヨンに生まれた。3年後の1903年、アメリカではライト兄弟がノースカロライナ州の小さな村キティホークで世界初の動力飛行実験に成功。人が空を飛ぶ時代の幕が開かれる。航空機の発達とともに成長したアントワーヌ少年は、やがてあこがれのパイロットに。地中海、北アフリカ、アンデス山脈、北大西洋、……地球を巡る飛行体験を元に著した数々の小説で、世界中の読者を魅了する人気作家となる。今で言うなら、宇宙飛行士で小説家、あるいはF1レーサーで小説家……それくらい常識はずれな才能の持ち主だったとも言えるだろう。

『星の王子さま』はそんな彼が、1943年、ナチスドイツに占領された故国フランスにいるユダヤ人の旧友レオン・ウォルトに思いを馳せて書いた唯一の童話だ。

●日記をこっそり読まれるなんて、夢の中でもあまりいい気持ちはしないわ。

○そうだね。悪いことしたと思うよ。でもそこは図書館なんだ。手を伸ばせば、誰の日記でも自由に閲覧できるんだ。

●星の数ほどたくさんある日記の中から、どうしてわたしのを見つけたのかしら。

○さあ、夢の中だからね。ふと本棚に目をやると、明るい緑色の華装の小型ダイアリーが十数冊、き

れいに並んでた。偶然なんだけど必然みたいに、それはそこにあったとしか言いようがない。それがものごころついてからきみが書き続けてきた日記だということを最初から知ってたみたいに、ぼくは迷うことなく手に取って読み始めたのさ

「わたしは、この本を、あるおとなの人にささげたが、子どもたちには、すまないと思う。でも、それには、ちゃんとした言いわけがある」という書き出しで始まる『星の王子さま』の前書きには、加えて次のような印象的な言葉が記されている。「おとなは、だれも、はじめは子どもだった。(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらいもない。)」

この文章の本当の意味を理解することができるのは、おそらく子どもたちではない。特に括弧でくくられた事実目に目を開かされる思いを覚えるのは、大人たちのほうだ。

たとえば、フランク・ザッパの1枚の肖像写真。彼の背後に写っている本棚の背表紙の中から『The Little Prince』の小さな文字を見つけたとき、ぼくはこの大発見をみんなに伝えたくてたまらない気分になられた。そう、この本は大人になっても手放してはいけない。この本を手放してしまったら、人は自分が子どもだったことを本当に忘れてしまう。そして、ぼくは、この本があったきみの部屋の本棚のこともきっと忘れてしまうだろう

●それで？ わたしの日記帳の唯一の読者から、ぜひとも感想を聞かせてほしいわ

○それはそれはとても素敵なものだったよ。また幼かったころのきみの日記は、大きな字で一所懸命に綴られていた。元気で素直ないい子だったことがわかって、思わずニコニコしてしまったさ。中学時代は仲良しの友達や憧れのクラブの先輩のことばかりが、もう何ページも何ページも書かれていた。高校時代のきみはもうずいぶん大人た。几帳面な字で、読んだ本や聴いたレコードのことが書いてある。で、大学に入ってから彼のことがばっかり。けっこうドキドキしながらページをめくったよ。

○アハハ、ばかね。で、あなたのことはどう書いてあったかしら？

●なかなか登場してこないんでイライラしたね。そんなに印象薄かったのかな。

○そんなことないわ。あんなに大きな花束もらったことなかったって、ちゃんと書いてあったでしょう。

●うん。あの日のきみは本当に喜んでくれていて、読んでるぼくまで嬉しくなっちゃったよ。で、そこからはぼくたちのことばかりだ。いっしょに見た映画やレストランの名前……すっかり忘れてたことまで全部書かれているのにはまったく驚いたね。旅先から出したポストカード、手をつないで歩いた道、最初のキス、クリスマス・プレゼント、いっしょに明かした夜のこと……。きみが

あんなに小さなことまで、こんなに大切に思ってたなんて。あの頃のことを、いっぺんに思い出してしまったよ。

○でも、もう会えない、別れようって言ったのは、1年前のあなたよ。

「王子さまは、草の上につづびして泣きました」というシーンを覚えているかい。故郷の小さな星に四つのトゲのある花を残してきた王子様は、地球で五千本のバラの花たちと出あって、この世にたったひとつだと思っていたあの花が、あたりまえのバラのひとつにすぎなかったことにショックを受けるんだ。1ページ全部を使った大きな挿絵の中で、王子さまが丘の上に横たわっている。アンドリュー・ワイエスの絵に出てくる少女みたいにね

でも、友達になったキツネが「あんたの花は世の中に一つしかないんだよ」と教えてくれる。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」

○きみの日記帳の最後の1冊は、ぼくと別れてから昨日までのことを綴ったものだ。ぼくは息を凝らしながら一氣に読んだ。いや、それはもう、ページをめくりながら文字を追っていくという通常の読み方じゃなかったと思う。ぼくは草張りの日記帳を手にながら、じっと目を閉じていただけだったのかもしれない。毎日のきみの仕事、きみの買い物、八百屋で見つけた野菜や果物から、輸入雑貨屋の食器、FMラジオで耳にした曲やレンタルビデオの感想、駅までの道で見かける犬や草花の様子、それから、空の色、星座、月の満ち欠けまで……きみが毎日を過ごしながら発見したさまざまなことがそこには綴られていた。まるできみが生きているこの世界の、宇宙の、どんな小さなことでも忘れまい、失うまいとするかのように、毎日のページがまったく新しいことがらで埋められているのが、手に取るように、ぼくにはわかってしまったんだ

●最悪な日記ね。でもそれ、まちがいがなく、わたしの日記帳だわ

サン＝テグジュペリの操縦するロッキードP-38ライトニングは1944年7月31日、偵察飛行に出たまま、地中海上で消息を失った。『星の王子さま』は終戦後の1946年、パリのガリマール社から彼の遺作として出版された。「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ……」王子さまの言葉の意味を、世界中の人が探し始めてから、50年が経つ。

「だけど、目では、なにも見えないよ。心でさがさないよね」

引用：『星の王子さま』サン＝テグジュペリ作／内藤濯訳・岩波書店より

この展覧会は、インターネット上のプロジェクト「メガ日記」とリンクしています。

<http://www.ntticc.or.jp/~mega/>

今回は、たくさんの人の日常生活そのものが、作品となります。もしよろしかったら、ネットをとおしてこの展覧会に参加して下さい。

八谷和彦

1997 2/8sat.-3/23sun. (CLOSED: Second and Fourth Monday)

Eva Hesse* Vito Acconci* Matthew Barney* Mona Hatoum* Marina Abramovic*
Yayoi Kusama* Robert Gober* Minako Nishiyama* Rebecca Horn* Ma Liuming*
Janine Antoni* Marie-Ange Guilleminot* Soo-Ja Kim* Go Kato* Kazuhiko Hachiya*

世田谷美術館 〒157世田谷区砧公園1-2 TEL 03-3415-6011 (代表) NTTハローダイヤル (展覧会のご案内) 03-3272-8600



De-Genderism

ジェンダーレス

destruire dit-elle / il ~ 破壊する身体 ~ détruire dit-elle / il

開館10周年記念

開館時間 午前10時～午後6時 (土曜日は午後8時まで / 入館は閉館30分前まで)

エヴァ・ヘス* ヴィット・アコンチ* マシュー・バーニー* モナ・ハトゥム* マリナ・アブラモヴィッチ*
草間彌生* ロバート・ゴバー* 西山美奈子* レベッカ・ホーン* 馬六明*
ジャニーヌ・アブントニ* アリー＝アンジュ・ギルミノ* キム・スジャ* 加藤豪* 八谷和彦*

1997年 2月8日(土) - 3月23日(日) (第2、第4月曜休館) 上MA

世田谷美術館 SETAGAYA ART MUSEUM

主催: 世田谷美術館 朝日新聞社 助成: 芸術文化振興基金 協賛: 国際交流基金 協賛: プリンスウエガサナル 協力: 日本航空 (株) 竹尾 東京急行 ユーロスペース

後援: アメリカ大使館 フランス大使館 オランダ大使館 協賛: (株) 資生堂 トヨタ自動車(株) アサヒビール 玉川高島屋SC 安田火災

世田谷美術館 SETAGAYA ART MUSEUM

壊れつつ力を増して行く抱擁

私がつくろうとしているものは未だかつて誰も思ったことのないものであり、名付けることができないもの、あらゆる定義からのがれようとするものなのです。

1968年 エヴァ・ヘス

タイトル、「デ・ジェンダリズム」は、ある人間のアイデンティティを問うとき、まず男か女かを問う、そしてその社会的役割（ジェンダー）というフィリターを通して「その人は何なのか」を判断しようとすることへの疑問から始まっています。もちろん性差だけでなく、多くのイデオロギーや思想が「イズム」を形成し（人種差別主義；レイシズムや社会主義；ソーシャリズムなど）、これらはその人がどういう人間なのかという分類分けをするうえでも機能しています。

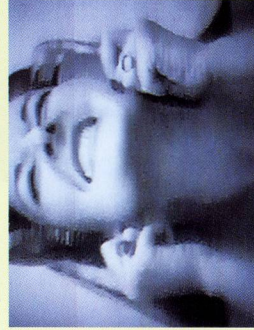
20世紀末を迎え、近代が築いてきた価値観がゆらぎ、地滑りのにさまさまなイズムの構造が崩壊しつつある今、これらにこだわ

り続けることへの疑問が今呈示されています。このタイトルはすべてのイズムを見直し、これを脱構築することへの呼びかけと、まずあなたをしばる性差の呪縛の見直しからはじめて、存在、身体、体のありのままの原点に回帰することへの呼びかけ、2つの意味での積極的な21世紀にむけての提案が込められています。

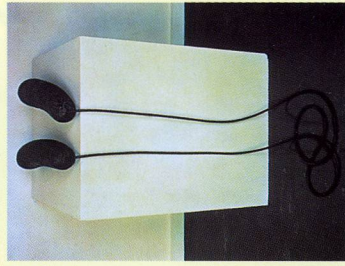
8カ国、15人に及ぶ出品作家たちはいずれも、自身の身体、存在とあるがままに向き合い、表現を通じて世界との唯一の新たな関係をさぐっていきこうと模索してきたアーティストたちです。ある者は主流であるモダニズムへの批判を通じて、ある者は身体への試練を通じて…。地滑りの的に崩壊して行くものの中から、次なる形がたちあがっていくような不安な過程です。ゆえに今、私たちが求められているのは、自分と他者をしっかりと見据え、世界を抱擁する勇氣と想像力ではないでしょうか。



ロバート・ゴッバー (1954-)
「1/2男性、1/2女性の露状トルソ」1990
Courtesy of the artist



マリナー・アラモ・エウリッチ (1946-)
「アートは美しくなければならぬ／アーティストは美しくなくてはならない」 Courtesy Marina Foundation



エヴァ・ヘス (1936-1970)
「反復」1965 個人蔵

デ・ジェンダリズム

～回帰する身体～

観覧料

一般 900円 (800円/720円) / 大・高生 700円 (600円/560円) / 中・小生 400円 (350円/320円)

65歳以上720円 ()内は前売り/20名以上の団体料金

前売り入場券はJR東日本で発売





レベッカ・ホーン (1944-)
「羽根の年風」1978 個人展



西山美奈子 (1965-)
「ザ・ピンくはうす」1991 (参考作品)



ジャニーヌ・アントーニ (1964-)
「マヌ・ババ」1993-1994 Courtesy of the artist

※映像作品

ユロスベース (渋谷)にて

マシュー・バーニー「クレマスター1」35mm映画

日時：2月22日(土)～3月13日(木) 午後9時より

入場料：一般 ¥1,200 学生 ¥1,000

入場の際、展覧会半券をご提示になりますと

割引引き料金(¥900)でご覧になれます。

会場：ユロスベース

渋谷区桜ヶ丘町24-4 東武富士ビル2F Tel.03-3461-0211

主催：世田谷美術館 ユロスベース

※パフォーマンス作品 会場：世田谷美術館講堂 入場無料

日時：2月9日(日) 午後3時頃～午後6時

マリーナ・アブラモヴィッチ「クリーニング・ザ・ハウス」

日時：2月11日(火・祝) 午後3時～午後3時30分

馬六明「世田谷の馬六明」

※アレナホールにて展覧会開催記念レクチャー・ショー

「マリーナ・アブラモヴィッチ

パフォーミング・ボディーズ～自作と身体芸術を語る」

出演：マリーナ・アブラモヴィッチ (同時通訳あり)

日時：2月13日(木) 午後7時より (開場6時30分)

入場料 前売り：¥1,500

チケット販売：チケットぴあ 03-5237-9999 (1/13より)

会場：アレナホール

東急新玉川線・田園都市線 大井町線 二子玉川駅下車徒歩3分

玉川高島屋S・C 西館1階 世田谷区玉川03-17-1

主催：世田谷美術館 協賛：玉川高島屋S・C

展覧会関連企画

会場：世田谷美術館講堂 入場無料

※シンポジウム「21世紀のアイデンティティに向けて」

日時：2月8日(土) 午後2時～午後5時

定員：200名(先着順)

出演予定パネリスト：小林康夫(東京大学教授、表参道文化論)

榎木野衣(美術評論家)／他出品作家(通訳あり)

※関連フィルム・ビデオ上映会 定員：180名

日時：3月1日(土)、2日(日) 午後2時～上映開始

マリーナ・アブラモヴィッチ アンドウ・ライ「ラヴァーズ」16mm映画

栗山明(ギャラリーQ)撮影「馬六明と北京東村の記録※」ビデオ、他

日時：3月8日(土) 午後2時～上映開始

※3月2日(日) 午後3時より馬六明に関するレクチャーつき上映あり

講師：栗山明(ギャラリーQ) 詳細はお問い合わせください。

世田谷美術館

〒157 東京都世田谷区砧公園1-2 tel.03-3415-6011(代)

NTTハローダイヤル(展覧会のご案内)

tel.03-3272-8600

本展覧会ではホームページを開設しております

<http://www.setagayamuseum.or.jp>



交通案内

○東急新玉川線「用賀」駅下車 徒歩17分

又は、美術館行バスで「美術館」下車

○小田急線「成城学園前」駅よりバスで「砧町」下車 徒歩7分

118

Contemporary Art Center, ATM ARTS SCENE 90-96

水戸芸術館
ART TOWER MITO

「アートシーン90-96」水戸芸術館が目撃した現代美術

第1期: 見ることは信じること

1996年11月30日(土)→1997年1月19日(日)

会田誠、IFP、赤崎みま、イチハラヒロコ、小林孝亘、ジャン・グルーバー、
杉山知子、曽根裕、ダグ&マイク・スターン、堂本右美、鯨津朝子、中澤真純、
八谷和彦、バーバラ・キャスティン、福田美蘭、宮島達男、森村泰昌、
遊佐辰也、吉澤美香、ロバート・メイブルソープ

第2期: 浮くかたち

1997年2月1日(土)→1997年3月16日(日)

青木野枝、川俣正、クリスト&ジャンヌ・クロード、小清水漸、蔡國強、長沢英俊、
中ハシケンゲ、中原浩大、中村哲也、西村陽平、藤浩志、間島領一

会場: 水戸芸術館現代美術ギャラリー 開館時間: 午前9時30分→午後6時30分(入場は午後6時まで) 休館日: 毎週月曜日(ただし12月23日は開館)、12月24日(火)、12月29日(日)から1月3日(金)
主催: 水戸芸術館現代美術センター 企画: 森 司(水戸芸術館現代美術センター学芸員) 協力: 株式会社竹尾、ウーヴ・クリコ シャンパン、松下電器産業株式会社、株式会社創夢
入場料: 一般800円/前売り600円/中学生以下・65歳以上、身心障害者の方は無料/H.T.P.1,000円(15歳以上20歳未満の方が対象。1年間有効パス。) URL=<http://www.soum.co.jp/mito/>
チケット・H.T.P.発売: JR東日本みどりの窓口、びゅうプラザ、水戸芸術館チケットカウンター お問い合わせ: 水戸芸術館現代美術センター 〒310 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8120

JR東日本で前売入場券発売中

お求めはJR東日本みどりの窓口、びゅうプラザ(旅行センター)、営業支店へ。
前売入場料=600円、H.T.P.=1000円

JR
JR東日本
☎223650 ☎221930

●「アートシーン90-96」

水戸芸術館が目撃した現代美術

日常生活でのプライベートな思いとともに、90年代のこの7年間にはバブル崩壊や オウム騒動、さらに阪神大震災など、さまざまな社会事象の記憶を蓄えたとしたら、アートに関してはどのような体験と記憶を持ちえたのでしょうか？

90年に開館し企画展を軸に事業を進めてきた水戸芸術館現代美術センターが目撃し関わった「アートシーン」を、「作品」のコレクション同様に文化施設が蓄えた財産として積極的に見なしたいと考えました。そこで、90年代前半の日本のアートシーンを振り返り、忘却の中に取り込まれる前に、新たな発見や意識を持つ機会として、水戸芸術館所管作品とこれまで企画展においてコラボレーションした作家の芸術館未発表作品で構成し、この7年間の視覚的に再体験する場として本展を企画しました。

具体的には、第1期で平面、絵画、ビデオによる作品やインタラクティブな表現を、第2期では彫刻、立体作品とプロジェクトの記録を展示します。また、同時期に本展と対をなす、言葉による90年代前半のアートシーンの 記憶の書として「現代美術事典90s」を刊行いたします。

主な出品作品

●第1期

- 1室：福田美蘭「Marker」95年作他／森村泰昌「セルフポートレート（描かれたビルボード）」96年作
2室：杉山知子「たった1000軒の家」95年作／会田誠「ポスター（18点組）」94年作他
3室：IFP「アナザーワールド（空の眺め）」92年作（所管作品）
4室：八谷和彦「見ることは信じること」96年作
5室：小林孝巨「Beehive」96年作他／堂本右美「あうん」96年作他／吉澤美香「と-98」96年作他／ワークショップ：曽根裕「ナイトバス」95年作
6室：遊佐辰也「Whales」94年作他／鯨津朝子「INSIDE-OUT wind OUTSIDE-IN」96年作／ジャン・グルーバー「無題」88年作他（所管作品）／ロバート・メイブルソープ「無題」88年作他（所管作品）
7室：中澤真純「無題」96年作／赤崎みま「UNTITLED」94年作／バーバラ・キャスティン「メタフェイス 8」86年作他（所管作品）／スターン・ツインズ「ダブル・ステップ・ディティルス」87-88年作他（所管作品）
8室：イチハラヒロコ「ガラス細工のくま」96年作
9室：宮島達男「カウンター・ボイス・イン・ジ・エアー」95年作

●第2期

- 1室：小清水漸「浮くかたち」88年作（所管作品）
2室：中原浩大「レゴ・ブロック」90-91年作他
3室：中村哲也「蝶王」96-97年作他
4室：藤浩志「流れの観察」96年作
5室：長沢英俊「花々の園」85年作（所管作品）／中ハシクシゲ「茶室-莽莽望」94年作
6室：川俣正「フィールドワーク」90-96年作／クリスト&ジャンヌ・クロード「ライヒスターク」96年作他
7室：青木野枝「UNTITLED」95年作
8室：蔡國強「水戸風水流脈図」94年作
9室：西村陽平「時間と記憶」96年作
屋外：間島領一「カーカーズ」95年作

Contemporary Art Center, ATM ART SCENE 90-96

◎H.T.P.特別企画「クリスマストーク」

毎年12月に開催する「高校生ウィーク」（12月1日から28日まで、高校生は入場無料）にあわせて、本年度は一般公開の「クリスマストーク」シリーズ（全3回）を下記の日程で開催いたします。

○12月8日（日）クリスマストーク1「安斎重男の90年代のフォト・アーカイブ」講師：安斎重男

○12月15日（日）クリスマストーク2「"柿の木プロジェクト"のおはなし」講師：宮島達男

○12月22日（日）クリスマストーク3「"視聴覚交換マシン"に関するすてきなおはなし」講師：八谷和彦

*視聴覚交換マシンを二人組で体験するワークショップも行います。

場所：水戸芸術館会議場

時間：14時から16時（開場13時30分）

定員：80名（先着順）

料金：有料（当日のみ発売、予約不可）、高校生とH.T.P.は無料

発売：水戸芸術館チケットカウンター

◎パフォーマンス「ヤセ犬の散歩」

日時：1997年2月9日（日）10時から17時まで

会場：水戸芸術館現代美術ギャラリー

パフォーマンス：藤浩志、ヤセ犬

無料。但し、展覧会入場券が別に必要となります。

◎茶会

日時：1997年3月1日（土）、2日（日）、15日（土）、16日（日）13時から17時

会場：中ハシクシゲ氏出品作品、茶室「莽莽望」にて参加無料。但し、展覧会入場券が別に必要となります。

協力：水戸市茶道連合会

◎関連プログラム

1. 対談「90年代のこの7年間」

日時：1996年11月30日（土）13時から16時（開場12時30分）

会場：水戸芸術館ACM劇場（自由席）

定員：300名（先着順）

料金：有料（当日のみ発売、予約不可）、H.T.P.は無料

発売：水戸芸術館チケットカウンター

第1部：「現代美術事典90sとは？」

時間：13時から14時

パネリスト：村田真（美術ジャーナリスト）／渡部誠一（当センター主任学芸員、「現代美術事典90s」編集者）

第2部：「90年代前半の日本にアートが残した軌跡は何か？」

時間：14時15分から16時

パネリスト：峯村敏明（美術評論家）／榎木野衣（美術評論家）

司会：森 司（当センター学芸員）

2. シンポジウム「環境としてのミュージアム」

日時：1997年2月1日（土）13時30分から16時30分（開場13時）

会場：水戸芸術館ACM劇場（自由席）

定員：300名（先着順）

料金：有料（当日のみ発売、予約不可）、H.T.P.は無料

発売：水戸芸術館チケットカウンター

「環境としてのミュージアム」を標題にこれからの美術館像を探るために、「コレクション」「企画」「マネジメント」の3つのテーマで討論していただきます。

パネリスト：青木正弘（豊田市美術館学芸担当主幹）／南條史生（美術評論家）／広本伸幸（川村記念美術館学芸部担当課長）／清水敏男（水戸芸術館現代美術センター芸術監督）

司会：森 司（当センター学芸員）

◎「水戸芸術館現代美術センター編

現代美術事典90s」

"ART TOWER MITO Contemporary Art Center & ART WORDS 90s"

90年以降の美術動向を語るために必要な事象および語彙、すでに90年以前に用いられているが今日新たな意味が不可されているとになされている語彙、当センターの事業活動を語る際に必要な語彙など360項目、図版120点を収録。

総ページ：約200項

発行：水戸芸術館現代美術センター

企画：渡部誠一（当センター主任学芸員）

◎ウィークエンド・ギャラリートーク

毎週土曜、日曜日の14時と15時30分より、ボランティアスタッフと参加者が互いにディスカッションしながら展示を見学します。参加ご希望の方はギャラリー入口にお集まり下さい。

参加無料。（但し、11月30日と1997年2月1日は休みます）

【交通のご案内】

【JR】上野駅から、常磐線特急スーパーひたちで65分、水戸駅下車。北口バスターミナル4・5・6・7番のりばから泉町1丁目下車、徒歩約5分。

【高速バス】東京駅八重洲南口バスターミナル3番のりばから常磐高速バス水戸行きで約100分。大工町下車、進行方向へ徒歩約5分。

【お車】水戸芸術館地下駐車場をご利用下さい。駐車場入口は芸術館北側東端です。料金は1時間200円です。